六十年前の幼稚園

吉田　昇

山川均の「ある凡人の記録」という自伝のなかに、明治二〇年頃の倉敷の町の幼稚園の話がでてくる。

「私はおそ生れのため、かぞえ年八つになつて、小学校にあがつた。そのまえに、ほんの僅かのあいだそのころはじめてできた幼稚園に通うた。村の人たちは『ヨーチン』といつていた。神崎先生という小学校の先生の背の高い美しい奥さんが、たつた一人で五・六人の子供たちに、そのころはオルガンもなにもなかつたので、手拍手で歌などをおしえていた。私はこの『ヨーチン』で、『蝮々、蝮々、菜の葉にとまれ』をおぼえた。しかし村の人たちは、まだ『ヨーチン』の必要を感じなかつたので、まもなく立ち消えになつた。」

初期の幼稚園の状況は、よくわかるが、問題はこのころの人々がなぜ幼稚園を必要としなかつたかということでわかる。

当時の人々が幼稚園を必要と感じなかつたことには多くの条件が考えられる。

第一に、子供を扱う人が家にいたことが挙げられる。この頃は、結婚年齢が低く、大家族であつたので、祖父母が家に居ることが多く子供の面倒をみてくれた。子供の話が、「昔々おじいさんとおばあさんがあつて」で始まるのも、このためかもしれない。明治時代に育つた多くの人々は、その伝記のなかにお祖母さん子であつたことを認めている。お祖母さんがいるので、子供を外に出す必要がないというのが、幼稚園の必要をみとめない一つの理由であつたと思われる。

第二には、子供の遊び場に不自由がなかつたということである。子供達は、自由に野原に出て、遊び廻つていた。町に住んでいても木登りや、釣をすることが出来たのである。犬のように遊び廻るだけでなく、みるものも沢山にあつた。山川均は、

「私は往来にしやがんで、オケのタガを入れるのや、もつと卑ー

い職業とされていたゲタの歯入れを熱心に見物した。それで今でも、私は、道具と材料さえあてがつてもらえば、おカマの穴くらいりつぱにふさいでみせる自信がある。

といつている。豊富な経験カリキュラムは、自然の生活の中に組み込まれていたのである。

第三に、子供の心身の発達にとつて危険たものが社会の環境のなかに存在していなかつたという事情がある。往来にしやがんで仕事場をのぞいていても自動車にひかれる心配はなかつたし、俗悪な娯楽も少なかつた。面白いものといえば、祖母から話してもらうお伽話であり、お祭に同行する事であつた。とくに子供を保護しなければならない必要感は薄かつた。

第四に、身分階級が固定していて、幼稚園が、ひろく大衆のものゝためにならなかつたことである。もう一度山川均の表現を借りると、

「上の層と下の層とは金を持つと金を持たぬという区別のほかにつまりは、そこから生じたことはちがいないのだが、日常の生活習慣のうえのちがいというものが、定形化され格式化されており日常の言葉までも、はつきりとちがつていた。

この状況のもとでは、一部の人が来る幼稚園には他の身分のものは入れたくなつてしまう。これが倉敷の町で幼稚園が発達しなかつた一つの理由である。

そして最後に、幼児期の重要性が認められていなかつたことがあげられる。幼児には幼児の特性があることも、幼児期の生活が、後の精神的発達に重要な関係のあることも、当時の人々には理解されていなかつた。幼児に中庸の素質を教えようとする親もあれば、子供の頃はという一言で片づけて、無関心な親もあつた。倉敷の町でも、新らしがりやが、自分の子供を幼稚園に通わせているといゝたいばかりに、学校の先生の奥さんのところに子供を通わせたものと思われる。

このように、幼稚園を成立させる条件が欠けていたから、まもなく立ち消えてしまつたのである。これに反して、六〇年後の今日幼稚園が非常に発達して来たのは現代は生活構造が非常に変つて来たためである。幼稚園を不必要とした条件は、全部解消してしまつたといつてよい。

しかし、現代の幼稚園が、次第に自覚されて来た右の五つの逆条件に十分答えているかどうかについては、かなり反省すべきことが多い。むしろ現代の幼稚園は条件が沢山あるだけに、その一つだけにでもかなつていると、明治時代のように立ち消えにはならないで続いてゆく。そして、生徒がくるからといつて、そのまゝですましている場合も、少くない。なかには、父兄の見栄で通わせるだけの幼稚園さえも絶無ではない。

これらの点を反省して、現代の幼稚園がどうあるべきかを工夫するには、社会条件の変化をはつきりと思い浮べてみることが大切であろう。こゝに、半世紀も前の幼稚園のことを書いてみたのも、現代の社会構造を考えて、地域の実情にかなつた機能を反省してもらう一助ともなればと思つたからである。

（御茶の水女子大学助教授）